

〔史料翻刻〕

六人部是香著 『道之一言』

山中芳和

ここに翻刻するのは、六人部是香著『道之一言』の本文および跋文である。同書は豊橋市立中央図書館所蔵本であり、「参河国羽田八幡宮文庫」の旧蔵印が押された、嘉永六年初冬の刊記のある版本である。著者の六人部是香（寛政十〇文久三）は山城国乙訓郡向日神社の神主であり、平田篤胤門の国学者である。

Keywords : 史料翻刻・六人部是香・『道之一言』

解題

(一)

六人部是香の古道論に関する著作は、『順考神事伝』、『すゞの玉籤』、『産須那社古伝抄広義』が『神道大系諸家神道(上)』に、『産須那社古伝抄』が『日本思想大系五一・国学運動の思想』に、『顕幽順考論』が『神道叢書』にそれぞれ翻刻されている。しかし、『道之一言』およびその講義用の『道之一言講義』（東北大附属図書館狩野文庫蔵）については、六人部の国学思想を考察する上で欠かすことの出来ない著作であるものの、いまだ翻刻がなされていない。

『国書総目録』（補訂版）は同書について次のように記載している。『道之一言』一冊（別）みちの一言（類）国学（著）六人部是香（成）嘉永六刊。所蔵情況は、版本が内閣文庫、刈谷市立図書館、無窮会神習文庫、石川県立図書館李花亭文庫他に、写本が東京国立博物館にそれぞれ所蔵されている。

本稿において翻刻するのは豊橋市立中央図書館所蔵本であるが、同書の巻末の次のような記載から、六人部是香が平田篤胤同門である三河の羽田野敬雄の羽田八幡宮文庫に寄進したものであることが知られる。

安政六年己未長月寄進
山城国乙訓郡向日郷
向日神社神主 六人部美濃守是香
文庫文預 羽田野常陸敬雄

なお、羽田野敬雄の国学受容と羽田八幡宮文庫の設立経緯については、拙著『近世の国学と教育』（一九九八年、多賀出版）第五章「幕末期国学の地域における展開―三河地方における羽田野敬雄の国学受容とその活動を中心に」を参照していただきたい。

(二)

ここに翻刻する『道之一言』は、六人部是香の国学思想において如何なる位置をしめる著作であるのか。

岡山大学教育学部学校教育講座、七〇〇―八五三〇 岡山市津島中三―一―一
Reprint of Mutoke Yoshika's "Michi no Hitokoto"

Yoshikazu YAMANAKA : Department of School Education, Faculty of Education, Okayama University, 3-1-1 Tsushima-naka, Okayama 700-8530

従来指摘されてきたように、六人部是香は平田篤胤に出会うことによつて、それまで歌学を中心に展開してきた学問の内容を大きく変容させる。

すなわち文政六年（一八二三）の平田篤胤の上京に際し、是香は父節香とともに篤胤を支援し、これを契機に篤胤に入門する。これ以後、篤胤は六人部是香を「行々御頼母しき辱き」人、「京都一人の知己」と意識するようになる（渡辺金造『平田篤胤研究』八七二頁）。

それとともに六人部は文政八年より『挫魔慨論』を書きはじめ、同十年には『日中神事記』を執筆するなど、六人部の学問の志向は一転するのである（三輪和平「六人部是香の幽冥観に関する一考察」『神道史研究』二九号）。こうしたなかで、六人部の学問の、神道思想への傾斜に決定的な契機となつたのはいわゆる嘉永六年（一八五三）のペリー来航事件であろう。

それは「万一強欲熾盛の夷賊ども戦艦を連（ツラネ）て押し寄る事の有まじきにもあらず」という『道之一言』の一節からも窺えるのである。さらに、翌安政元年（一八五四）の『道之一言講義』にはより明確に、「亜墨利加をはじめ尚其外の国々よりも戦艦を連ね出来て強て皇国に通商を請ふときく」（『道之一言講義』東北大学附属図書館狩野文庫蔵）と記しているように、外圧への対応を意識した論を各所に展開するのである。六人部の国学思想は、幕末期日本が置かれた対外的な危機状況の認識のなから、神国としての国体の確立という問題にその関心を収斂させていくのである。このように、『道之一言』及び『道之一言講義』の二つの著作は、六人部の国学思想を幕末期の思想状況に正しく位置付けるためには必須の著作であるといつてよい。

凡 例

- (一) 本稿は六人部是香著『道之一言』の本文および跋文の翻刻である。
- (二) 底本は豊橋市立中央図書館所蔵本である。「参河国羽田八幡宮文庫」の旧蔵印が押され、嘉永六年（一八五三）初冬の刊記のある版本である。
- (三) 底本の異体字・変体仮名は通行のものに改め、漢字の振仮名は漢字のあと（一）のなかに記した。
- (四) 底本の「万一國」、「天一地」などの一は、翻刻では省略した。
- (五) 改行は底本の通りとし、適宜句読点を施した。
- (六) 翻刻の許可をいただいた豊橋市立中央図書館に謝意を表する。

〔翻刻〕 六人部是香著『道之一言』

道之一言

天地の開闢国土人民の濫觴をはじめ、天地の間、造化の妙合、君臣の大義、経世の綱紀、彝倫の叙、はた幽冥の幽冥政（カクリコト）、歿後靈（タマ）の往方（ユクヘ）などの事ハ、漢土竺土はいふも更なり、万国にて論評せる事どもハ悉く人智よりいでたる推度計議の憶説なるを、独り皇国に伝りつる古道ハ、其天地を開闢し、国土人民を生産し、万代の綱紀を立給へる

神魯岐（カムロギ）神魯美命（カムロミノミコト）の大御口（オホミクチ）づから伝へさせ給へるままを伝へ来し道なれば、万事に涉りて違ふ事無く、謬つ事無く、いと正しく伝りつるものなり。然るを、中古以来、死後の事ハ佛氏に依り、顯世の教ハ孔氏を宗とする事と成つるより、今の世人は如此（シカ）のみ思ヒ執ことの心癖（ココログセ）となり果つれば、其ノ毒の多寡淺深ハ稟賦に依て異（コト）なりといへども、これを駆除する事ハ專吾カ古学の良薬を用るにあらざれば根治することあたはず。然るに世人其ノ良薬ある事を知らず。故に今一言（ヒトコト）微を挙てさる沈痾の人の目を刮（ケツ）り耳を堤げて諭さんとす。そもそも、

天照大御神（アマテラスオホミカミ）の大御言（オホミコト）をもちて
皇美麻命（スメリマノミコト）に大八島豊葦原水穂国（オホヤシマトヨアシハラミツホノクニ）は吾御子（アカミコ）のつぎ

つぎ
君と坐（マス）べき国なり、寶祚之（アマツヒツギノ）隆盛（サカエ）まさむことハ天壤（アメツチ）の共（ムタ）無窮（トコシヘ）なるべしと言寄（コトヨザ）したまひし大御言のごとく、

皇美麻命（スメリマノミコト）の天降（アマクダ）りましてより五千余歳を經たる今ノ世に至るまで、
皇美麻命（スメリマノミコト）ハ現人神（アラヒトカミ）と大坐（オホマシマシ）て天下を政令大坐（マツロヘオホマシマシ）し、

皇別神別の國の重臣等も、各く其ノ家を世々にして、誠忠仁慈を御心（ミココロ）として、近くハ、御前（ミマヘ）の事を執政（トリマヲ）させ給ひ遠くハ諸國に干城として武備嚴重に守護（マモラ）せたまふ。如此（カク）君臣ともに、出自正しく、無窮に奉仕するが如き美事、漢土竺土は云も更なり、

一地球の中何国(イツク)にかある。また、皇国の五穀は豊宇氣大神(トヨウケノオホカミ)の御徳(ミイツ)に因て化生(ナリ)出づる因(イハレ)、古伝の上

に昭々たるが如く、殊更

天照大御神の其ノ齋庭(ユニハ)の穂を天降し賜へる因(イハレ)によりて、米の万国に超越(スグレ)て珍重(メテ)たく貴き事ハ、近來一地球に属(ツケ)る国々の風土食物などの上もよく知られたるに考へ合して思ヒ悟るべし。人ハ本より尊き神孫なるが故に誠忠仁慈を其ノ性に分賦して生(アレ)しめ給へるがうへに、米をはじめ五穀は更なり、他(アダ)し野菜魚鳥に至るまで、神の生成(ウミナ)し給へる国に生育するが故に、其ノ味はひ他邦に勝(マサ)れる事、雁鴨の類ヒの他邦より渡り来つる時ハ、其味ハ淡薄にして好(ヨ)からざるを、皇国に暫し栖(スミ)たる後ハ、忽チ膏良の美味と化(ナル)に考へ合してもよく知られたり。如此(カク)、万の食物共に珍重(メテ)たき物を常食とするが故に、人物の多智剛強なる事、他邦に十倍せり。但し、西洋人の天文を窮理測量し、病因を分離実験し、あるひは薬剤の製練奇巧の精微なるなどを見て、唯多智の然らしむるとのみ思ふは違へり。これ中古以来西洋の国風にして、唯代々を重て物を研窮するのみにあらず。衆国衆人の説を集め、其宜しきを総括して事物を成すが故に、思ノ外の精微の説微妙の奇巧なども成すにこそあれ。もし、皇国人の彼等が成すが如き筋に思惟を凝(コラ)しなば、彼ノ夷人等の数百年を積て考経出ぬべき事どもをも、数十年を俟(マタ)ずして事成(ナ)しぬべし。されバ、これらの事をもて、西洋人を多智なりと思ふは思慮の足ざるなり。然るを、とかく西洋学の徒ハ、彼ノ夷人とも、戦艦火攻の術に長(タケ)たる事どもをとりどりに称譽するが故に、其ノ説に聞懼(キキオチ)する人どももあるよしには聞ゆれども、阿那(アナ)尊(タフト)きかも、上には武備嚴重に掟(オキテ)させたまひ、下には衆人一致して、君の大御為(オホミタメ)国の御為にと身命を擲ちて、数百年來昇平の恩沢に浴したる大恩を酬報し奉らむと思ふ人のみなれば、万一強欲熾盛の夷賊ども戦艦を連(ツラネ)て押し寄せる事の有まじきにもあらず、若シもさる事も有バ、元(モト)より勇猛多智の皇国人一度思惟を凝(コラ)しなば、忽チ神機妙算を得む事、掌を指すが如くなるうへ、其ノ期に及ば、皇国守護の幽冥大神等(カクリノオホカミタチ)の神変不可思議術の神助あらむ事、弘安慶永の古轍を履(フミ)ても思ひさとりぬべし。加之(シカノミナラズ)

皇国の鐵ハ金ノ神金山彦神(カネヤマヒコノカミ)の化成(ナシ)ましつる品なるが故に、骨は更なり、金石をも断割するの鋭刀を用ひて、肉ならでは截(キル)こと能はざる鈍刀を用る夷人に対し、火ノ神の化生(ナシ)ませる清浄の齋火(イミヒ)、水ノ神の化生(ナシ)ませる潔白の水華(ミツハ)を用ひて製練したる火薬を用ひて撃ち立なば、本より夷賊どもの惡穢不浄の火薬の大炮、何の恐懼(オソ)る事かハあらむ。これらの事どもを尚も疑ヒ思はん人よ、近く異邦万国に生産するの万物ハ、何にまれ脆弱にして皇国の物の稠密剛勁なるが如きには至らざる事、紙墨漆などの如きものの、脆(モロ)く艶(ツヤ)無きをもても知るべく、尚また、鳥獸の皮毛竹木の手ざはりに至るまで、皇国の品に比べては悉く寒冷なるハ、火神の御徳功(ミイツ)の深く及ばざるが故なるにも思ヒ合せて悟るべし。如此(カク)事々物々、万国に比べてハ皇国の超越(スグレ)たる事を知り、さて上に挙たる如く、皇美麻命(スメリマノミコト)の天降り給し時の神勅、既に五千有余歳を経たるの今日に到るまで巍然として違ふ事無く、国土五穀をはじめとして金鐵水火に至るまで、悉く神の化生(ナシ)ませるといふ古伝の如く万邦に別(コト)なるに徴證しても、皇国に伝るところの古道ハ天地を鑄造し給へる神魯岐(カムロギ)神魯美命(カムロミノミコト)の教授したまへる道なれば宇宙の間に又と比例すべき道無く、卓絶たる道なる事をもよく思ヒ悟るべし。彼ノ孔氏の道の遂に全く行はれし時代無く、ただ机上の空論なるも、佛氏の金口に説き出たる事どもも、纔(ハツカ)に数百年の後を俟(マタ)ずして忽チ事実の違へるなどは天地懸隔せり。かかれば顯世ハ更なり、歿後幽冥の上をも常によく古道に順考して、魂(タマ)の往方(ユクヘ)を鎮定し彼ノ海行者水漬屍山行者草生屍(ウミユカハミヅクカハネ、ヤマユカハクサムスカハネ)君の御楯(ミタテ)と成ぬべき神語(カミコト)のまにまに父母兄弟にも先立て、誠忠仁慈の行ヒを其ノ君邊に極め竭(ツク)しぬべく神習(カミナラ)ふ御教を学び、天下の衆庶常に神に対して耻する事なく、勇猛堅固にして其ノ学ふところの学行一致に勤めなハ、国体いよいよ剛猛にして外夷を恐懼(オソレ)ず、自然に国家安泰ならむと負氣無(オフケナ)けれど一言主(ヒトコトヌシ)の神言(カムコト)に倣(ナラヒ)て、吾もまた吾一言(ワカヒトコト)に云離(イヒハナツ)になも。

嘉永六年七月

是香

此ハ往(イニ)し七月一日ばかり、或人の乞ヒつるままに書て与へつるかり

そめ言(ゴト)なるを、其草稿の凡ノ邊りに散ほひたりしを、常に來通(キカヨ)ふ吾カ党二三子(トモノコラ)これを見出て、請て持往(モチユキ)たりしが、其後板に彫せて已かじく分ケ配らばやと乞へりしかど、阿那忌々に乞ふ人がらに依りてこそかかる事をも記し出つれ、大方(オホカタ)の人に對て道に預れる事ともを、如此(カク)さまに云ひては大(イタ)くものそこなひとなるべけれどと止(ヤミ)たりき。然るに、いつしか密かに板に彫せて持チ出來て、此ハ一言ながら道の要を摘みて書キ出給ひつるものなれば、誰も誰も見まほしかり争ヒ競ひて写すめるがいとほしさに制止(トトメ)られしものから、かくハ彫せて順考館にハ納メ置き待るとて持來りしかば、今ハ為方(セムスベ)無きものから、板にも彫すへくば尚少しハ加へ置へき事もありつるをといふを聞て、さる事も侍らば同じくハ此ノ奥に添へ置てよと請ふままに、またしも書てあたふるになん。

いでや、人には賢愚曲直あり。学には浅深厚薄あり。学ばざれども智あるもあり、学べとも愚なるもあり。これらの人を押並べ云ヒ論して一定せしめん事ハ筆硯の及ぶべきところにあらず。されば、佛にのみ姪する愚夫愚婦の輩ハ暫く措(オキ)て論ぜず。儒を宗とする徒ハ仁義を除(オキ)てハ、修身齋家の教方ハ世にあるまじき事とのみ思ひ、たまたま皇國の古伝のかたはしを聞てハ、漢土太古の織緯不經の史籍に思ヒ比へて唯妄誕とのミ思ヒ執り、甚しきハこれもまた人智に出たる教方と思て、深く学て其ノ道の弘大無邊なる趣を知らん事を要せず、また佛に心を寄する輩ハ皇國にさる尊き道の伝はれる事を知ず、仏菩薩には靈驗奇瑞を仰ぎ、宗派につきてハ其ノ宗祖の甘言行力に信伏して、遂に其ノ迷霧の裏を出離する事能はず、これらの輩ハ仏にハ師翁が著されし印度藏志、さてハ吾カ挫魔慨論、儒には中庸論語の国意解を熟読させなバ、けだしや看破する事もあらむか。抑々これらの道を宗とするの輩ハ、其ノ心漢土竺土にあるが故に、皇國学に第一義とするところの誠忠の真義を知らず。誠忠の真義を知らざるが故に、事に臨みて心に憶するが故に其任甚タ危し。されバ、吾皇國古道の本義を常に明らめ置くとときハ、天下の衆庶世に生産し來るの本因を知るが故に、顯世中にハ忠節を盡すを以て最も第一義と為べき本義を得意し、遂にハ未來幽冥境の上をも明亮に察知するがゆゑに、過頭未の大道昭々として心中に疑慮ある事無し。されバ事に臨みて迷はざるが故に憶する事無く、憶せざるが故に忠節を全くして神明眷顧の冥助を蒙るに到らむ。豈愉快ならずや。

【割注かく記しける時(ヲリ)しも、加賀金沢なる中橋三鈴か許より消息おこ

しける中に、今年ハ越の國々も早(ヒテリ)甚しかりしかば、能登ノ國一ノ宮氣多(ケタノ)社にて祈雨ありし時、大宮司櫻井氏殊に丹誠を抽て七日の祈雨に齋籠られしが、其七日に満する日ハ遠近の衆庶群参したりしを、社裏より黒雲めくもの立騰(ノボリ)て其ノ裏に八寸ばかりの鏡の如く見ゆる光り物二ツきらめき出たり。群集せる衆人これを見て、アレヨアレヨといふうち、海上はるかに飛去りけり。其時社内に有ける三人の男、彼光物の氣に觸て倒れ伏してぞ氣絶しける。かかるところに一天俄にかき曇り、大雨大地を打抜が如く降そそぎしかば、群參の衆庶皆感涙を流してぞ歡喜(ヨロコビ)ける。此靈応の神異なりしに付て思へバ、此ころ人の云ヒ騒ぐ異國の船とも、よしや何千艘出來りたりとも、諸國の神社よりもまた神異を顯はして冥助あらんこと疑無し。さらば、少しも恐怖(オソル)るに足らずと云ヒおこしつるにつけて、尚また按(オモ)ふに、肥前の長崎なる諏訪社にても其ノ神驗によりて妖氣を掃除(ハラヒ)たまへりし靈驗神異の殊ともを慥に聞つるに思合するにも、如此三鈴がいひおこしつるか如く、神助の皎著なると武威嚴重なる皇國にしも若シ敵なふ戰艦などの出來らむには、必ス船ハ微塵に碎(クダケ)け、夷人ともハ残らず鑿(ミナコロシ)にぞ成ぬべき】

然るを吾古道を奉ずるとにハあらでただ皇國の古代をのみ慕(シタ)ふ事を専らとするいはゆる王室学と唱ふる一派あり。多くハ儒學者よりいで、或ハ神道者などいふ徒よりいで、漫りに古代の王室を慕ひ、遂にハ後代の掟(オキテ)を侮(サミ)し、或は己が心に符(カナ)はざる事しもあれば、漫りに憤怒を興して其ノ身罪に陥る事を知らず。かかる徒ハ歯牙に懸て論ずるにも足らずといへども、これらハ彼標的(メアテ)ちがひの学文にして、吾カ古道学の上よりいふ時ハこれもまた蒙霧の中に迷へりといひてまし。然れども口には皇國を尊び心にハ王室を崇むるよに通(キコ)ゆれば、彼儒仏の徒などの外見には、かかる輩をも國学の一派ぞと思ふめるよしなるハ、吾古道学に執りてハ、いとも傍痛(カタハライタ)くあぢきなき学ヒになん。それのみならず、近キ頃ハ古学の一派語釈家よりいでて神代を釈(トク)とて、いはましくも尊き古伝説を、己か狡意(サカシラ)をもておもふがままに取捨厭離して、杜撰(ミダリ)に説を設けて、或ハ幼談(ヲサナガタリ)ぞ此ハ附会ぞと、かけまくもゆゆしく積キ成(ナ)したるはもはら禪家の不立文字、教外別伝といふを極意(シッココロ)として、和漢竺蘭混淆したる今ノ世人の俗意に協(カナ)へん事を表に立て曲釈しつるものなれば、ともに論ずるに足らず。彼ノ夏虫氷雪をうたがふの愚論なるのみにあらず、遂にハ獅々

身中ノ虫となるの罪を知らず、非謗(ソシリ)を万代に貽(ノコ)しつるハ、
いともあはれむべき見識(ココロ)にハあらずや。されども、これらハかの
稟賦の賢愚曲直、学の浅深厚薄によりて分派しつるものなれば、とかくのは
非におよはず、たは漢学仏学蘭学、さてハ其ノ末派なる道学心学などいふこ
とを学びたる輩よ、今吾カ古道の万邦の道に超越(スグレ)たるよしを説キ
論したるかの一言を聞執りて、いちはやく心を飄して、もし皇国学を奉仕せ
んとする輩もあらバ、かかる左道にハ踏まどはず、皓天白日に十字街道を行
がごとき吾カ古道の本義を明らめ得て、
君の為国の為誠忠(マココロ)をつくしきはめんことをなわすれそよと。ま
た立ち還りて、二言三言いひそふるになも。

六人部宿禰是香

天地之(アメツチノ)曾伎幣之幾波美(ソキヘノキハミ)築立武(ツキタテ
ム)曾之誠忠叙(ソノマココロソ)国之真柱(クニノミハシラ)

篤舎先生殊錫社友同志以此書其說凜乎極
天人徹宇内其論確乎不可動使士人一見之
必将有扼腕慷慨之志勃勃發者矣令夷賊聞
之戰慄寒胆而軍艦忽變貢船矣豈不愉快哉
先生使真彦校写故欣然奉命一日夜忘寢忘
食校之且以淨写之益比為書異于先生平常
所著記事文法者要欲使讀者易得其領袖也
是一言之所以命歟 川喜多真彦識

嘉永六年初冬